

## 市民シンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」

### 2 1 世紀を生きる私たちへ

山田 俊弘（広島大学総合科学部長）

「ヒトはいつか絶滅するのでしょうか？」と問われれば、100%の生物学者が、「絶滅する」と答えるでしょう。

古生物学者は、生命の歴史の中で500億を超える生物種が誕生したと見積もっています。一方で、現在の地球上には、ヒトを含めて900万に満たない種しかいません。これはつまり、地球に誕生したほとんどすべての種が、すでに絶滅していることを意味します。

もっとも、「ヒトも他の生物と同じ様に絶滅する」という結論は、帰納に基づく推論です。ですから、「今までの生物種はすべて絶滅したけれども、ヒトに限っては絶滅しない」、と考えを進めることも可能です。しかし、望みは薄いでしょう。

いずれ絶滅する運命にあるヒトですが、問題は、「いつ？ どうやって？」でしょう。残念ながら、この問いに答えられる生物学者はいません。きっと、これから絶滅までの時間に、たくさんのヒトの個体が生まれ、彼らは私たちが過ごしているような日々をずいぶん長く繰り返すことでしょう。

種は、種分化により誕生した後、個体数や分布域の拡大と縮小を繰り返し、やがて絶滅します。その様は、ヒトの一生になぞらえることが出来るかもしれません。ただし、種の一生では、ヒトの一生に比べ途方もなく長い時間が費やされます。通常、種の寿命は数百万年から一千万年と言われています。

数百万年という時間、ヒトにはどうもピンとこない長さです。100万年前の地球の姿を具体的に想像できる人は、きっと少ないはずですが、人生100年と言われるようになりましたが、それでもたかだか100年です。その程度の時間の中に生きているヒトの認知能力の限界のため、100万年を超える年月は想像しがたいものになっています。

種（の一生）のように、私たちの身の回りには、ヒトの認知能力をはるかに超えた存在が多数あります。進化、生物多様性、自然環境、造山運動や地殻の変動、プレートテクトニクス……。こうした存在に対峙したとき、ヒトは例外なくうろたえます。こうした、ヒトの認知能力を時空間的にはるかに凌駕した存在は、ハイパーオブジェクトと呼ばれています。

自分はどこからきて、どこに行くのだろうか？ 私が存在する理由は何だろうか？

“自分探し”とまとめられるこうした疑問に、あなたも一度は取りつかれたことがあるのではないのでしょうか。もし、あなたもその一人ならば、納得のいく自分探しの答えは見つかりましたか。もし答えにたどり着けなかったとしても、それが当たり前かもしれません。なぜならば、人間の能力を超えた問いに挑戦しているのですから。

しかし、簡単に答えにたどり着けないからと言って、ハイパーオブジェクトに関する問いをあきらめるのは間違いです。要は、「私たちは、ハイパーオブジェクトを分かっていない」と現状を認識するとともに、「そもそも、ハイパーオブジェクトは理解しがたい対象だ」と認知し、粘り強く、時間をかけて向き合っていくことが重要だと思います。